

あとがき

日蓮宗現代宗教研究所 主任 高佐宣長

第十四回日蓮宗化学研究発表大会は、平成二十五年十月二十一日、日蓮宗宗務院で開催されました。本冊子は、当日の発表内容を収録したものです。

平成二十四年度、八年ぶりの宗勢調査が行われました。そこには、戦後続いて来た宗門の教勢の伸長が転換点を迎えていることを、データとしても示すものがあるように見受けられました。

これは、人口減少社会へと転じた現代日本社会がもたらす一つの必然でもありますが、そう言って済ませてはならないことでありましょう。

「葬式離れ、墓離れ、寺離れ」が言われて久しいところですが、詮ずるところは僧侶離れであるとの指摘を、どう受け止めるべきなのか。否、受け止め方を論じている段階はとうに過ぎているのではないのでしょうか。

左記の通り、第十四回日蓮宗「化学研究発表大会」を開催致します。

日蓮宗僧侶は、明日を見据えて、今、何をなすべきなのか。布教の現場に立脚した化学の研究発表を承りたいと存じます。多くの方々の方々の発表申込みをお待ちしています。

「宗報」平成二十五年八月号掲載の発表者の募集には右のように記しました。

右にあります通り、平成二十四年は、平成十六年以来の「宗勢調査」が実施されました。

日蓮宗の宗政調査は、「日蓮宗宗制」第十号宗政調査会規定に基づき、宗勢調査会が行っており、調査報告は『宗報』平成二十五年四月号に掲載されています。

この調査にあたり、所管部である総務局総務部より協力依頼を受け、質問項目作成の段階より、三原所長を始め、現代宗教研究所のメンバーもお手伝いをさせて頂きました。

そして、この調査結果について、現宗研にて独自の分析を加えたい旨、総務部に相談した所、御快諾を頂きましたので、現宗研なりの切り口から考察を加えた成果を近く御提示させて頂く予定です。ここに改めて、宗政調査会並びに総務部に御礼申し上げます。

本誌には、この報告に先立って、第十四回教化学研究発表大会において、宗政調査プロジェクトチームのメンバーである岩田、池浦、原、各研究員、及び灘上嘱託の四師によってなされた発表を収録いたしました。現宗研としてはなく、個人としての発表ですが、だからこそ書き得た内容になっているかと存じます。近刊予定の現宗研としての報告書と併せて御一読ください。

この他にも昨年度テーマとした原発や、千葉県南部宗務所管内における過疎・過密についてなど、多様な観点からの発表が収録されておりますので御高覧いただければと存じます。

また、こうした場で拙稿について触れるのは如何なものか、なのではありませんが、拙稿そのものではなく、その種の著者であり、「ざとり世代」論にとどまらず、今や売れっ子文化人となっている感のある博報堂若者研究所の原田曜平氏を、現宗研内部の平成二十六年年度最初の勉強会の講師としてお招きすることとなりました。現宗研として、次世代教化という問題への取り組みも、深めて行きたいと考えております。

この若者教化の問題とも密接に結びつくのが、神奈川県大明寺住職で、日本脱カルト研究会常任理事として、いわゆる「破壊的カルト」と呼ばれる集団からの脱会支援等の幅広い活躍をされておられる楠山泰道師による特別発表で

す。

もちろん、収録された部分だけで十分に有用な論考なのですが、有り体に申し上げますと、発表の性格上、本誌には収録しきれなかった部分が多々ございました。

論文集ではなく、口頭発表の場を設けることの意義の一端は、こうしたオフレコ部分にあるかと存じます。本誌を御高覧頂いた皆さんには、是非、次回大会への御参加（発表者としてであれ聴講者としてであれ）を御期待申し上げます。大聖人の教えを広め、立正安国を実現して行く方途について、現場に立脚しつつ現場に埋没しない教化学の知見を高め合える場を作り上げて行ければと念じております。